

日本ジョージ・エリオット協会

第26回全国大会プログラム

日時：2023年12月9日（土）午前10時～午後6時

場所：北九州市立大学北方キャンパス本館4階（B402教室、C402教室）

住所 〒802-8577 北九州市小倉南区北方4丁目2番1号

電話 093-964-4004 Homepage <https://www.kitakyu-u.ac.jp/>

アクセス：（北九州空港をご利用の場合）

航空機の到着に合わせて西鉄バスが運行しています。

九州自動車道・中谷三萩野（高速）經由砂津行きにご乗車ください。

競馬場前（北九州市立大学前）下車 約35分

会場：C402教室（本館4階）

会員控室：B402教室（本館4階）

開催校委員：

北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

受付開始：9:30～

総合司会

大阪産業大学特任准教授 藤原 知予

開会の辞・開催校代表挨拶（10:00～10:05）

北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

研究発表 10:10～10:50

司会：元川村学園女子大学教授 田中 淑子

マギーとジェーンの選択：『フロス河畔の水車場』と『ジェーン・エア』における

主人公の比較考察

東京都立大学助教 佐久間 千尋

会長挨拶 10:55～11:00

京都大学教授 廣野 由美子

総会 11:00～11:45

司会：日本大学非常勤講師 堀 伸介

休憩・昼食 11:45～13:00

シンポジウム 13:00~16:00

題目：『フロス河畔の水車場』再考——テキストを身近に

教室で読む『フロス河畔の水車場』 講師 桜美林大学教授 大竹 麻衣子

『フロス河畔の水車場』における子ども性 司会・講師 山口大学教授 池園 宏

翻訳の領域 講師 和洋女子大学名誉教授 植松 みどり

『フロス河畔の水車場』の異なるあり方について 講師 京都女子大学教授 鴨川 啓信

特別講演 16:00~17:00

司会：京都大学教授 廣野 由美子

演題：「ジョージ・エリオットとトマス・ハーディのイングリッシュネス
——カントリーハウスとコテージのある田舎の風景——」

講師：西南学院大学教授、日本ハーディ協会会長 金子 幸男

閉会の辞 17:00~17:05

日本ジョージ・エリオット協会副会長・慶應義塾大学教授 永井 容子

懇談会 17:05~18:00

*前年同様に懇親会は行いませんが、ご都合のつく先生方は大会会場にお残り頂き、ご交流して頂く形式になります。

日本ジョージ・エリオット協会

(The George Eliot Fellowship of Japan)

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

TEL: 087-899-7152 (直通)

E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage: <http://www.g-eliot.com>

<研究発表要旨>

マギーとジェーンの選択：『フロス河畔の水車場』と『ジェーン・エア』 における主人公の比較考察

佐久間 千尋（東京都立大学助教）

エリオットがチャールズ・ブレイに宛てた手紙において、ブロンテの『ジェーン・エア』における“self-sacrifice”に異議を唱えたことはよく知られている。ジェーンが“self-sacrifice”という選択を経てロチェスターとの結婚に至る一方、『フロス河畔の水車場』のマギーによる選択は彼女にとって苦難となる結果を伴う。

本発表では、ジェーンとの比較という観点から、マギーの選択について考察したい。両者の選択は異なる過程を経るが、各々が愛着を深める建物—ドールコート・ミルとソーンフィールド・ホール—はいずれも崩壊する。空間との関連性も視野に入れ、マギーの選択に潜むエリオットの真意を探りたい。

<シンポジウム要旨>

題目：『フロス河畔の水車場』再考——テキストを身近に

司会 池園 宏（山口大学教授）

本シンポジウムの発案の由来は、ジョージ・エリオット協会内における『フロス河畔の水車場』再考の機運の高まりにある。2022年に新たな翻訳書が出版され、さらに本作品の教科書化の作業が進行中である。いずれも協会主催の企画であり、本シンポジウムの登壇者のうち二人が携わっている。このたび登壇者の面々が共有するのは、本作品をより身近で親しみ深いものとするためのアプローチという方向性である。植松氏には翻訳の立場を通して見えてくるもの、大竹氏には教科書執筆の立場を通して見えてくるもの、鴨川氏には映像化された作品を通して見えてくるもの、池園は本作品における子ども性を通して見えてくるものというように、各人が独自の視座から考察を行うことで、作品の新たな魅力を見出すことができると考えている。

教室で読む『フロス河畔の水車場』

講師 大竹 麻衣子（桜美林大学教授）

多くの古典的な英文学作品が最初に新たな読者と出会うのは、大学の英語や英文学の授業を

通じてではないだろうか。ある作品を何を学ぶためにどのように読むかはそのテキストが読者（学生）にとって身近で親しみ深いものとなるか否かを大きく左右する。報告者は *The Mill on the Floss* を素材とする大学英語教科書の執筆に取り組んでいるが、教室での「読み」を、できる限り学生が原作の魅力や複雑な問いかけに直接向かい合える場とするためにはどうすべきかという点を大きな課題としている。本発表では、報告者がこのような課題を念頭に担当する英文学の講義/演習において本作品を扱った際の実践報告を軸に、「教室で読むこと」にまつわる問題と可能性について考えたい。

参考文献

- Eliot, George. *The Mill on the Floss*. 1860. Oxford UP, 2015.
- Henry, Nancy. *The Cambridge Introduction to George Eliot*. Cambridge UP, 2008.
- Newton, K. M. *George Eliot for the Twenty-First Century: Literature, Philosophy, Politics*. Palgrave Macmillan, 2018.
- エリオット、ジョージ『フロス河畔の水車場』植松みどり訳、彩流社、2022年。
- 日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』研究社、2017年。

『フロス河畔の水車場』における子ども性

講師 池園 宏（山口大学教授）

『フロス河畔の水車場』の特徴の一つとして挙げられるのは、作者の自伝的要素の反映に伴う生き生きとした子ども時代の描写である。本作品と子どもとの関係性については、主としてロマン主義的子ども観に基づいた国内外の先行研究があるが、本発表ではその前提を踏まえつつ、さらに各種の子ども研究関連分野の知見にも目配りしながら、テキストに内包された子ども性に焦点を当てて考察したい。子ども時代というのは我々が誰しも通る人生の段階であり身近な経験であるが、エリオットが子ども性という要素をどのような形で提示しているかという点に改めて光を当てることにより、出版当時から賛否両論を含めて議論の尽きない本作品について再考してみたい。

参考文献

- Banerjee, Jacqueline. *Through the Northern Gate: Childhood and Growing Up in British Fiction, 1719-1901*. Peter Lang, 1996.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature*. Houghton Mifflin, 1985.
- Coveney, Peter. *The Image of Childhood: The Individual and Society: A Study of the Theme in*

English Literature. Penguin Books, 1967.

Eliot, George. *The Mill on the Floss*. 1860. Penguin Books, 1988.

Hendrick, Harry. "Constructions and Reconstructions of British Childhood: An Interpretative Survey, 1800 to the Present." *Constructing and Reconstructing Childhood: Contemporary Issues in the Sociological Study of Childhood*, edited by Allison James and Alan Prout, Routledge, 2015, pp. 29-53.

エリオット、ジョージ『フロス河畔の水車場』植松みどり訳、彩流社、2022年。

翻訳の領域

講師 植松 みどり (和洋女子大学名誉教授)

与えられた課題は「翻訳の立場を通して見えてくるもの」である。だが『フロス河畔の水車場』の翻訳を通しては、見えてこなかったものばかりだ。時間も空間も遠く隔たったジョージ・エリオットの創作をひたすら言葉を探して表現していく。すると、これまでの翻訳のときと変わらず初歩的、基本的なところに突き当たる。創作者と読み手と翻訳者の立ち位置をどのように考えたらいいのだろうか。翻訳する者はどのように自由に作品に対処していいのだろうか。「翻訳者」とは誠心誠意努力する「読み手」であり、すなわち優れた「批評家」だと考えたのは大江健三郎氏だ。

もとより「いい加減」を楽しんで本を読んでいる者にとっては、責任の重い仕事だった。当シンポジウムで、その苦しみを具体的に少しお見せして、作品の“adaptation”はどこまで許されるものなのか、皆様に問いかけてみたいと思う。

参考文献

Belton, Ellen. "Reimagining Jane Austen: The 1940 and 1995 Film Versions of *Pride and Prejudice*." *Jane Austen on Screen*, edited by Gina MacDonald and Andrew MacDonald, Cambridge UP, 2003, pp. 175-96.

Eliot, George. *The Mill on the Floss*. 1860. Penguin Books, 1985.

Harris, Jocelyn. "'Such a Transformation!': Translation, Imitation, and Intertextuality in Jane Austen on Screen." *Jane Austen on Screen*, edited by Gina MacDonald and Andrew MacDonald, Cambridge UP, 2003, pp. 44-68.

Hopkins, Linda. "Mr. Darcy's Body: Privileging the Female Gaze." *Jane Austen in Hollywood*, edited by Linda Troost and Sayre Greenfield. UP of Kentucky, 2001, pp. 111-21.

エリオット、ジョージ『フロス河畔の水車場』植松みどり訳、彩流社、2022年。

エリオット、ジョージ『フロス河の水車場』工藤好美 淀川郁子訳、筑摩書房、1965年。

『フロス河畔の水車場』の異なるあり方について

講師 鴨川 啓信（京都女子大学教授）

『フロス河畔の水車場』の映画アダプテーション三作品を取り上げる。膨大な詳細描写をもつリアリズムの長編小説は、その全てをメディア変換して置き換えることができないアダプテーションにとっては、模範とすべき固定のオリジナルというより、むしろ物語素材の貯蔵庫として機能していると考えられる。上映時間95分、212分、116分と長さが異なる三つの映画アダプテーションは、物語素材の取捨選択を含め、小説に対してそれぞれ独自の解釈、場合によっては批評、を加え、物語の再創造を行っている。発表では、各アダプテーションにおける「圧縮」の働きと、映像的なクライマックスとなる洪水の描き方に注目して、この物語の神髄と多様性について考える。

参考文献・映画

Eliot, George. *The Mill on the Floss*. Oxford UP, 2015.

(エリオット、ジョージ。『フロス河畔の水車場』植松みどり訳、彩流社、2022.)

Hutcheon, Linda. *A Theory of Adaptation*. Routledge, 2006.

(ハッチオン、リンダ。『アダプテーションの理論』片瀬悦久、鴨川啓信、武田雅史訳、晃洋書房、2012.)

The Mill on the Floss. Directed by Graham Theakston, BBC, 1997.

The Mill on the Floss. Directed by Ronald Wilson, BBC, 1978-79.

The Mill on the Floss. Directed by Tim Whelan, Alliance Films, 1936.

波戸岡景太『映画原作派のためのアダプテーション入門—フィッツジェラルドからピンチオンまで—』彩流社、2017.

<特別講演要旨>

演題: 「ジョージ・エリオットとトマス・ハーディのイングリッシュネス——カントリーハウスとコテージのある田舎の風景——」

金子 幸男 (西南学院大学教授、日本ハーディ協会会長)

19世紀、産業革命による都市化と経済の自由主義がもたらす諸問題によりイングランドの人々が田舎に肯定的な目を向けるようになった。そのような田舎嗜好は、新自由主義とグローバリズムがもたらした社会不安の中でイングリッシュネスを問うようになったここ数十年間も変わらない。エリオットは中部イングランドの田舎を『アダム・ビード』(1859)に、ハーディは南部イングランドの田舎を『テス』(1891)に描いた。前者は18世紀から19世紀への変わり目の田舎、後者は世紀末の田舎を描き、100年の相違がある。100年で田舎の表象にどのような変化がみられるのだろうか。この講演では、イングリッシュネス研究の現在を概観しながら、二人の作家の田舎の表象を、上記二作品以外にも目配りしながら、イングリッシュネスの観点から眺めていきたい。

参考文献

- Colls, Robert & Philip Dodd, editors. *Englishness and Culture 1880-1920*. 1986. Revised ed. Bloomsbury, 2014.
- Dolin, Tim. *George Eliot. Authors in Context series*. Oxford UP: 2005. (邦訳) ティム・ドリン著、廣野由美子訳『ジョージ・エリオット』彩流社、2013年。
- Kumar, Krishan. *The Making of English National Identity*. Cambridge UP, 2003.
- Parrinder, Patrick. *Nation & Novel: The English Novel from its Origins to the Present Day*. Oxford UP, 2008.
- Reay, Barry. *Rural Englands: Labouring Lives in the Nineteenth Century*. Palgrave Macmillan, 2004.
- Smith, Anthony D. *National Identity*. University of Nevada Press, 1993. (邦訳) アントニー・D・スミス著、高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』晶文社、1998年。



学会にご参加いただくにあたってのお願い事項

- 学生会員を除き、会員の方は大会参加費 500 円（学生を除く非会員は 1000 円）をお支払いいただきます。できるだけお釣りがないようにお願いします。
- 休憩のため控室（本館 4 階 B402 教室）を設けておりますが、昨年に引き続き茶菓の用意はございません。同じフロアに自動販売機がございますのでご利用ください。

- 当日は土曜日につき食堂は営業していません。徒歩圏内にコンビニが2店舗ありますが、昼食は各自でご用意いただくことをお勧め致します。

大学への交通機関



アクセス

JRでお越しの方 (JR 小倉駅下車)

北九州モノレール小倉駅から約10分 競馬場前 (北九州市立大学前) 下車 → 徒歩約3分
 バスでお越しの方

福岡方面から、西鉄天神高速バスターミナルから小倉行高速バス (なかに号) で約70分
 競馬場前北九州市立大学前下車 徒歩約5分

小倉・田川方面から西鉄バスで北方・北九州市立大学前で下車 徒歩約3分

北九州空港をご利用の方

航空機の到着に合わせて西鉄バスが運行しています。

九州自動車道・中谷三萩野（高速） 経由砂津行きにご乗車ください。

競馬場前（北九州市立大学前）下車 約35分

学内案内図

会場は、本館4階 B402（控室）／C402（大会発表会場） です。

